

進徳の森と中村弥六の関連資料群

はじめに

進徳の森と中村弥六の関連資料群は、近代林学の父と呼ばれる中村弥六が、高遠城址公園を眺める峰山寺周辺にて、災害復旧を目的として土地を購入し、外国産樹種による整備を行なった「進徳の森」と、1879～1882年までドイツ留学した際にミュンヘン大学へ提出した学位請求論文など100年以上前の日本とドイツとの繋がりを示す資料と政治家としての活躍を示す資料からなる「資料群」がセットになった林業遺産です。

進徳の森の概要

「進徳の森」は、中村弥六が大正初期に植栽した0.4haの森林です。1911（明治44）年の大雨で中村家代々の墓所の裏山が崩壊したことを知った中村弥六が、私財を投じて土地を購入し、外国産樹種の苗木を植えてできた森林です。周囲がアカマツやコナラの二次林に囲まれる中で、ヨーロッパパトウヒやヨーロッパモミなどの外国産樹種が立ち並び森林は非常に特異的な景観で胸高直径90cm、樹高35mを超えるユリ

高遠ぶらり製作委員会 諸田和幸
長野県林業総合センター 小山泰弘
ノキが現在も生育しています。

明治30年の森林法制定に尽力した中村弥六が、このような森林を造った理由は、現地をよく見てみると分かります。

敷地の中央では、ヨーロッパパトウヒやヨーロッパモミ、ストローブマツが、それぞれの微地形に合わせて植栽されていますが、敷地境界には、在来種との区別が付きやすいヒマラヤスギやヨーロッパパトウヒ、ユリノキが植えられています。大正時代は山林での盗伐や誤伐などによる山争いが起きていました。自身が亡くなったあとでも確実に敷地内での盗伐や誤伐を防ぐために周りとは異なる外国産樹種を植栽したのだと思われます。

資料群の活用

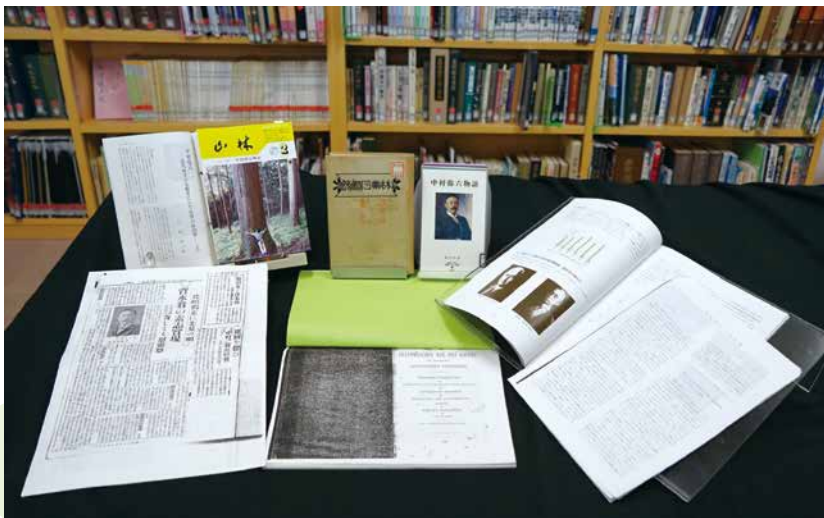
資料群を保存収集している伊那市立高遠町図書館では、地域にある膨大かつ多様な情報資源の活用に向け、2010年に「高遠ぶらり」プロジェクトを開始しました。その中で、これまで資料として埋もれてしまっていた古地図の情報をデジタルアーカイブ化し活用する取組として街歩きアプリケーション「高遠ぶらり」を開発しました。このアプリでは、古地図上にGPS（全地



『高遠ぶらり』プロジェクトでの街歩き



進徳の森への案内板



中村弥六資料群

球測位システムの現在情報を表示させることができ、利用者にタイムスリップしたような感覚を与えます。また、その地点に関する歴史・地域情報の解説も見ることができ、異なる時代空間を実感しながら街歩きをすることができます。

このプロジェクトでは「情報と情報、情報と人、人と人」の再構築のために、街歩きを実施してきました。取組を進める中で、ある参加者から「進徳の森」を題材にアプリを充実させることができないかとの提案があ

おわりに

このように、「進徳の森と中村弥六の関連資料群」の林業遺産登録は、地域課題解決のため、地域内外の方が場所を楽しむ中で、些細なことがきっかけとなっています。

が、先人たちが伝え、守ってきた歴史を後世に伝え、地域の魅力を住民・観光客に発信してきた取組への評価とも考えています。

この登録をきっかけに、林業と関わりが少ない方々に関心を持っていただくとともに、高遠にたくさんの方が観光に來られることになればと考えています。



アプリケーション「高遠ぶらり」